

マンスリー

サンズ・トーク(57)

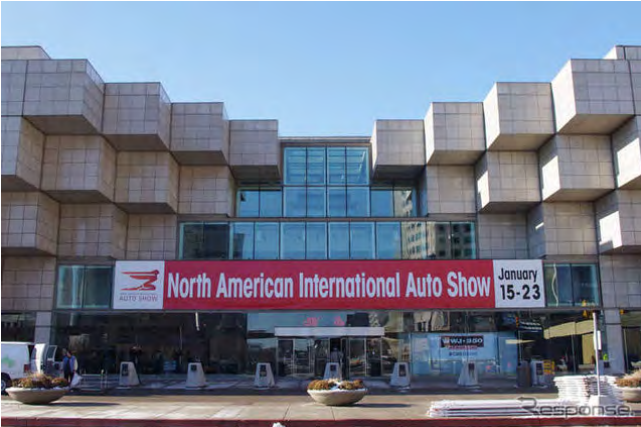
2013.8.1

木村 譚

デトロイトが財政破綻した

デトロイトといえば、アメリカ自動車産業の本拠であり、従来、強いアメリカの象徴と感じていた。ところが先月、市の財政悪化が高じ、負債が180億ドルに膨れ上がって破産を申請してしまったのには驚ろいた。特に、185万もあった大都市デトロイトの人口が、今では70万人にまで減ってしまったのには魂消る思いがしたのであった。

どうしてなのか。私は、最近の報道などいろんな情報を確かめ、今日に至った経過などを見てみた。



デトロイトモーターショウの会場

太平洋戦争が終わると、フォード、GM、クライスラーの御三家は繁栄の絶頂を謳歌し、昭和25年（1950）、デトロイトの人口は185万を超えていた。ところが、1967年、黒人労働者の暴動が発生し、治安の悪化を嫌って白人富裕層が周辺都市に移住するホワイトフライト現象が始まった。

1970年代になると、2度のオイルショックが世界経済を揺るがしたが、日本から安価で燃費のよい小型車が輸入されるようになって、大型車中心のアメ車は深刻な打撃を受け始めた。この頃、日本国内では、マイカーブームが爆発し、小型車が競うように増産され、数量効果により安価で輸出するようになったのである。我々が、始めてカローラを買えたのもこの頃だった。こうした影響で、デトロイトの車産業は、従業員を大量に解雇し、下請け企業は

倒産。街には失業者、浮浪者が増えて治安が悪化し、富裕層のデトロイトからの流しが歯止めなく続いたのである。

1980年にはビッグ3の税引き前利益がすべてマイナスになり、1990年にはデトロイトの人口が103万人に減って、自動車不況が進んだ。2009年には、GM、クライスラーがリーマンショックにより経営破たんした。ビッグ3は、政府の強力な援護もあって、短期に再生することができたが、生産ラインの海外移転が進み、デトロイトの就業者数は学校、役所、病院などが上位で、GMは9位、クライスラーは10位にまで下がってしまった。街には古い工場の廃墟が残り、雇用の減少が続いて市の財政が立ち行かなくなったのである。ダウタウンはゴースト化して、不動産価格は、事業用も住宅も無価値同然になってしまった。

市の財政が悪化して、住民サービスの質は当然ながら低下する。警官も減って、犯罪発生の緊急通報があったら、全米平均では11分後にパトカーが来るところを、1時間かかるのが普通になった。街灯は40%が点かず、犯罪が激増。レガシィ（負の遺産）コストといわれるが、市の退職者にたいする年金や医療保険等の支払い負担を切り詰めることができず、歳出が硬直化してしまったのである。

自治体の財政状況は住民の生活に影響する

財政が悪化すると、住民の生活に影響が及んでくるのは、夕張市の例を見ても判る。夕張市は炭鉱の街で、炭鉱が稼動していたときには、労働者が集まって、人口11万ぐらいの都市だった。ところが、炭鉱が全て閉山した1990年には2万人になり、財政再建団体になって今では1万人にまで減ってしまった。住民が離散し、高齢化率が高く（逃げられない高齢者が取り残される）、いよいよ住民サービスが切り詰められてゆく。なお、夕張市の財政悪化の要因には、炭鉱の街から、観光・リゾート地へと転換を図ったが、ハコモノを造って大きな負債を負ってしまったことがある。

こんな例を見るにつけ、我々は、自分の街の経済、財政パフォーマンスの先行きにもっと関心を持つべきではなからうか。他人事ではないと思う。